



こごみ日和

～みんなでごみゼロ～

No.43 2010.3

何気ない毎日の中に見つけないものがころころころがっている

秦家住宅 秦めぐみさんのお宅を訪ねました。

秦さんの町家暮らし、とりたてて特別のことはない、ほんの少し前まで私たちの誰もが持っていた充実した暮らしの時間が、そこには生き活きと刻まれていました。

今日のお話は、生活の質を見直す時がやってきているのではないかな。そこをしっかりと見てみたいというところから始めたいと思います。

「今はすべてが便利便利。何でもオートメーションのように暮らしの中に、ものが入ってきます。手間をかける隙が無い。

秦家住宅を訪れていたいただいた多くの方が今、生活の空白を埋めたいと感じておられるのがひしひしと伝わってきます。消費に追われるのではない創造的な暮らしを探しておられるのです。でも、その探し方がわからない。」

消費中心ではなく新しい暮らしの手がかりを求められているんですね。

「私はここでお料理の会を開いています。理屈を言ってもだめ。まずは実行していただくのが一番だと思っています。それには食というのでも入りやすい入り口だと思います。

そこではおいしいおすましをまず飲んでいただく。「ああ、これはおいしい。」

と思っていたところから興味が沸いてきます。食べることから変わっていく。

作りたい気持ちが自然と生まれてくるのです。そこを大切にしていけることが、新鮮な喜びとなっているように思えます。」

その次は一緒に作られると聞いています。

「はい。始めはおだしから取ってというのとてもハードルが高いのですが、顆粒だしとの味の違いがわかっていただけだと、これはもう皆さん元には戻られません。」

日々の暮らしに手作りを取り戻す。今の時代には大切なことだと感じます。多忙を理由にするのは得策ではないと思います。

例えば鰹節は今、1本3000円弱で買うことができます。これを鰹節削り器で削って作る。1本で半年間ほどもちます。鰹節のバックを買うより結果的には安い。そして何よりおいしい。ごみも出ない。(笑)」



なつかしいですね。振り返って考えてみるとそれはとても良い選択だと思えます。それに今日からすぐにはできる事。

子どもたちも一緒になって鰹節を削る。

「そうです。おすましなどでも1匹のじゃこの頭を取ってお腹を取ってフライパンで炒って、そこからだしを取っていくのですが、頭とお腹を取る作業を子どもたちにまかせてみる。子どもたちは自分の役割ができたとき真剣になりますし、知らず知らずのうちにのちに触れるという尊い気持ちが育ってきます。それは学校ではできない。家庭でこそその仕事です。そして「おいしい」を記憶の中にとどめていく。そんな何気ない日常が今、求められているのだと感じています。」

ありがとうございます。話は尽きませんね。次号でもお話を聞かせてください。

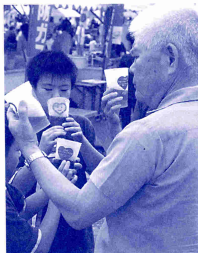
2R活動が生み出す
コミュニケーション

NPO地域環境デザイン研究所ecotone 代表理事 太田 航平

「ごちそうさま」「おおきに」「ありがとう」京都のお祭りやイベントでは、利便性や効率性などを重視したライフスタイルや価値観によって失われてしまったコミュニケーションを、現在どんどん取り戻しつつある。

国の循環基本法に基づく第二次循環型社会形成基本計画(平成20年3月25日閣議報告)においては、循環型社会の形成に向けて、国民に3R(リデュース/リユース/リサイクル)の推進を身近な問題として捉えてもらうため、とりわけ2R(リデュース・リユース)の取組を強化し、使い捨てに対する消費者の意識に変革を起こすと共に、天然資源の消費を押さえることで、廃棄物の減量を一層図っていくことが重要とされている。

使い捨て容器、特に、ペットボトルや缶(スチールやアルミ)などは、回収・リサイクルされる場合には新たなエネルギー資源を必要とすることは周知の事実である。限りある資源を有効に使うという観点からは、ごみの発生自体をなくすこと「リデュース」はもちろんのこと、一般に省資源・省エネルギーですむ再使用「リユース」がリサイクルの前に必要不可欠な事項である。しかし、「リサイクル」のイメージが社会的に(経済的にも成り立ち)スタンダード化している一方で、「リデュース」「リユース」に関しては認知度が低く、多角的な取組が必要不可欠な状態だ。それ



リユース食器でお祭りを楽しむ市民

に対し、まだまだ事例は少ないが、ここ京都では市民が主体となり、2Rを重視した施策を他都市に先駆けて推し進めてきた実績がある。

例えば私たちの団体では、2Rの重要性を広く発信すべく、洗って何度も使用出来る「リユース食器」を用いた地球温暖化防止やごみ減量化の仕組みづくりから2001年から取り組んできた。ようやく「リユース食器」も全国的に浸透してきたが、実はこの考え方や実践内容、「リユース食器」というネーミングにハートのロゴマークなどは京都発の取り組みとして作成したものである。

区民祭りや大学の学園祭、保育園の夏祭りに地蔵盆などなど、大小規模を問わずお祭りやイベントの現場では、「脱・使い捨て」を掲げ、「ごちそうさま」「おおきに」と食器を返却する来場者の姿を数多く目にするようになった。なんともない光景のようだが、ただ「捨てる」という行為の中では、このようなコミュニケーションは生まれにくい。この「リユース食器」の仕組みが新たな選択肢

として定着し、お祭りやイベントにおける具体的な2R活動の実践につながっていることはとても感慨深い。

この仕組みづくりの過程では、市民のみならず、事業者や行政とのしっかりとした「協働」があった。新たな概念や価値を創造する上で、多様な主体が集まり、知恵を持ち寄り、自分の役割を責任を持って果たすことはとても創造的で楽しいことである。お祭りやイベントなど非日常の中でスタンダード化してきた2R活動は、さらなる協働のもと、日常生活の中でも京都ならではの取り組みに発展しようとしている。

皆さんも身近な2R活動に目を向け、使い捨て文化の中で忘れていたコミュニケーションを取り戻すと同時に、新しい環境に配慮した文化と一緒に創造していこうではないか。



マイボトルやカップへの飲料販売社会実験



市役所内に期間限定で設置したエコ・コンビニみやこスタイルの様子

地域も企業もわくわくする!グッドパートナーへの挑戦!

株式会社 堀場製作所 前野 晃男さん
 コーポレートコミュニケーション室長
 聞き手 大橋 正明さん
 みんなのビジョン創造研究所代表

社員一人ひとりが「おもしろおかしく」仕事と向き合える環境作りを大切にしている堀場製作所。その柔軟で、創造力溢れる“人財”が、世界でもトップクラスの分析技術を支えています。

堀場製作所がこれまで向かい合ってきた環境問題から何が導きだせるのか、そして企業としての価値をどう地域社会に活かしていくのか、ユニークな提案を伺いました。

◆堀場製作所は大気の見張り役?!分析技術が支える環境対策

大橋:堀場製作所が「環境」を意識し始めたのは、いつ頃ですか?

前野:1970年代初頭からの世界的な排ガス規制を背景に、堀場製作所の自動車排ガス測定装置が世界の自動車メーカーのエンジン開発で広く使用されるようになりました。その頃、いわゆる「公害問題」を解決するために、大気の成分を測定するなど、国や地方自治体との二人三脚も始まりました。現状を正しく把握することは、その後の環境改善策に繋がります。分析・計測技術を通して、大気汚染や水質汚濁といった、環境のことを深く考え、伝えていくことの重要性を、このころから認識していました。

大橋:エコロジーという言葉が身近ではなかった頃ですね。

前野:日本経済がバブル最盛期だった80年代後半には、環境に負荷を掛けないライフスタイルはあまり意識されなかったのですが、その頃から2000年まで「人と地球の分析技術」というキャッチフレーズを掲げ、地球環境を守ることを意識していました。また、環境問題の本質とはなんだろう?というテーマでラジオ番組を提供するなど、当時としては画期的な取組を行っていました。インターネットが普及をはじめめる96年からは、「ガイアプレス*1」というサイトを立ち上げ、地球環境や生態系の魅力についての情報発信を続けています。

◆環境問題の本質に迫る!これからのエネルギー対策について

大橋:前野さんが考える、環境問題の本質とは?

前野:一つは「エネルギー問題」について。地球上の生命が一番恩恵を受けているエネルギーは、実は太陽の光なのです。植物の成長には欠かせませんが、その植物を食べる動物、更には我々人間に至る生命循環の源が太陽エネルギーなのです。石油や石炭などの化石燃料も太陽エネルギーによる産物です。この地球環境の絶妙なバランス、豊かな生態系の相互共生を理解することなしに、本質的な環境改善は難しいでしょう。一方、この太陽エネルギーを電気としてもっと有効活用するための研究が、日々進んでいます。火力・原子力をはじめとする大規模な発電システムの発電効率や安全性向上の努力に加えて、これからは、地域ごとに電気を作り、有効活用するという、新たな発想を取り入れたエネルギー対策が進むでしょう。

大橋:クリーンエネルギーの活用が日常化すると、街の風景も変わってきますね。

前野:電気自動車のインフラ整備が進み、自宅の駐車場が、さながらミニ発電所の役割を果たすことも予想されます。また、一つのエネルギー源から二つ以上のエネルギーを取り出して使うコージェネレーションという考え方を導入することで、地域で発電したエネルギーを地域で使うという考え方が浸透すると考えられています。

大橋:エネルギーを“使う”暮らしから、“生み出す”暮らしへ、新しい地域社会の在り方が見えてきますね。





前野 晃男さん

◆ “おもしろい”を通して、人を育てる企業でありたい —

前野:もう一つ大切なことは、企業には“人を育てる”役割があるということだと思います。以前、京都市ごみ減量推進会議が主催する、“こ～みゃプロジェクト^{※2}”の中で、環境教育を担当する機会があり、子どもたちが育てたゴーヤの葉っぱの中に、どれくらいの硝酸、つまり栄養分が蓄積されているかを測る実験を行いました。植物にどんどん肥料を与えると、大きく立派な野菜ができますが、人間で言う通りすぎの場合があり、一概に健康な状態とは言えません。実際に堀場製作所の硝酸イオン測定機を使って、見た目だけでは分からない、植物の健康チェックに挑戦しました。はじめは、先生方も「ちょっと内容が難しいのでは」と心配されておられました。が、小学6年生にも理解できるように、内容を噛み砕いて、丁寧に説明をしました。すると、非常に反応も良く、普段の授業では体験できないことが逆に新鮮だった

ようで、多くの子供たちから「おもしろかった!」という評価をもらいました。子どもの理解力は、時として大人を凌ぐほどです。子どもたちに分析・計測の面白さを通して、科学や自然の魅力を伝えたい。堀場製作所ができる教育とは、子どもたちの“おもしろい”という柔らかな感性を育てることだと思っています。

◆ 地域に交流スポットを! 緑側コミュニティの実現に向けて

大橋:環境問題の本質を何う中で、企業とコミュニティ、つまり地域社会との繋がりが今後ますます重要なテーマになります。私たちの想いとしては、企業がコンクリートの壁で囲まれた孤立した存在ではなく、地域社会をより良くするための仲間であってほしい。そのために、地域の人を気軽に立ち寄れる“緑側”の役割をぜひ担ってほしいと思うのです。

前野:なるほど、近年、都会では見ることが少なくなった緑側ですが、古くから日本の家屋には、家の中に居ながらも地域の人と触れ合える共有の空間がありました。他人与人との距離をうまく保ちながら、必要なコミュニケーションを図る力を、地域社会との関わりの中で身に付けていたのです。地域の子供から大人までが交流し、情報交換を楽しむ“緑側コミュニティ”の実現、これから企業に求められるコミュニケーションの姿かも知れません。

大橋:この素晴らしい感性を、現代の日本人がもう一度取り戻すために、“緑側コミュニティ”を通して地域社会の再生をぜひ実現させましょう!

前野:世代を越えた、本当の意味での心の交流が、環境問題の解決だけでなく、地域の活性化や教育環境の改善、そして次の時代を動かすエネルギーに繋がっていきます。

大橋:今日のお話を踏まえて、環境問題からくつと視野を広げて、みんなが参加してみたいとわくわくするような提案を、一緒に実現させていきたいと思います。本日は、楽しいお話をどうもありがとうございました。



大橋 正明さん

*1 ギアプレス (Gaiapress) : <http://www.jp.horiba.com/sensorium/>

*2 こ～みゃプロジェクト:京都市ごみ減量推進会議の2R型エコタウン事業の一環として、商店街で出た生ごみを、地肥化し、地域の小学校での環境教育に役立てる取組。詳細な活動報告は、こごみ日和No.42特集「生ごみが地域を結び」をご覧ください。
ゴミゲネット: <http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/kaihoushi/index.html>

取材日:平成22年2月5日

取材:松村 香代子

株式会社 堀場製作所

本社:〒601-8510 京都市南区吉祥院宮の東町2
HP:<http://www.horiba.co.jp/>

嵯峨野地域女性会こみ減量推進会議

会長 丸尾 とみ子さん

「奥さん、この上着、よう似合はるわ。」

1点1点、きちんと衣装ラックに並んだ洋服を選ぶ、お客さんの目は真剣そのものです。「これやったら今の季節にすぐ着れるしなあ、よし、買とこ。」



お客さんとの会話の様子

交渉成立、売る側にも買う側にも自然と笑みがこぼれます。品物にまつわる会話も弾み、新しい持ち主へと物の命が引き継がれていきます。

フリーマの醍醐味は、「普段は出会えない人と、直接コミュニケーションができること」だと丸尾さんは教えてくれました。着こなし一つをとっても、思いもよらない発想を学ぶこともあるそうです。年代、性別、国籍を越えて、お客さんと楽しく情報交換ができる、フリーマに参加する意義はそこにあるようです。

丸尾さんが、嵯峨野地域女性会の会長になられたのは今から4年ほど前。それまでは、地域の教育・福祉の分野で熱心に活動を続けられ、長年培ったレクリエーションのノウハウを活かし、現在も障害をもつ児童やその家庭を支援されています。

嵯峨野地域女性会こみ減量推進会議を立ち上げてからは、使用済み天ぷら油の回収などへの協力ももちろん、市役所前フリーマへの出店も積極的に行っています。「まだ使えるものを捨てるのはもったいない、誰かに使って欲しい」と、会員に参加を呼び掛け、品物を提供してくれる家庭を1軒1軒回り、ご自宅にストック場所まで確保されるなど、準備に余念がありません。フリーマ当日は、

朝早くから車で荷物を運搬し、更に一日お店番、となかなかの体力勝負です。会員の皆さんや家族の協力があればこそ続けられる活動ですが、その中心的な役割を担う丸尾さんの行動力と意志の強さには、人をぐいぐいと惹き付けるパワーがありました。

肌で感じたことを大切に、次世代のために自分たちができることを一つひとつ実践する。そして、子育て中の若い世代とも協力しながら、昔は当たり前であった「ぬくもり」のある地域づくりを実現する。丸尾さんの挑戦は、今後も多くの人々の希望となり、地域を越えた取組として高まっていくことを確信しました。



丸尾 とみ子会長

取材日：平成21年11月22日

取材：松村 香代子



フリーマへ参加された皆さん

市役所前フリーマについてのお願い

“市役所前フリーマ”より、来場者の皆さまにお願いします。

毎回ご好評いただいている市役所前フリーマですが、来場者・出店者数の増加に伴い、近年いくつかの問題が起こっています。まず、ごみの問題。フリーマの開催後には、たくさんのごみが排出されます。中には、出店したものの、売れ残ってしまったものをこみとして捨てて行かれるケースがあります。「いらなくなったらいる人へ」がテーマであり、リユース（再使用）を促進し、ごみを減らすというのがフリーマ開催の狙いです。その趣旨をご理解いただき、出店・ご来場いただくようお願い致します。また、駐輪、駐車のマナーについても問題になっています。自転車でお越しの方は、臨時駐輪場を設けておりますが、スペースに限りがありますので、できるだけ公共交通機関をご利用いただけますようお願いいたします。尚、バイク・お車でお越しの方はお近くの有料駐車場をご利用頂きますようお願いいたします。

マナーを守り、楽しいフリーマを開催できるよう、皆様のご理解とご協力をお願い致します。

■今後のフリーマ開催予定日■

4月25日(日)※雨天時は5月22日(日)、5月16日(日)※雨天時は5月22日(土)
6月13日(日)※雨天時は6月20日(日)、7月11日(日)※雨天時は7月25日(日)

■お問合わせ：<プラスワンネットワーク>

フリーママーケット情報専用ダイヤル075-229-7714※テブ案内
その他のお問合わせ：075-229-7713

事務局からのごあいさつ

京都市ごみ減量推進会議事務局の山田です。昨年4月に事務局を預かり、10数年ぶりに環境行政に携わってから、まもなく1年が経とうとしています。

私が最初にお世話になったのは、まだ「清掃局」とよばれていた時代。10年ひとむかしと申しますが、大きく様変わりした「環境政策局」には驚きを隠せません。

年間約80万トンものごみを処理すべく、5つの清掃工場が目一杯稼働していた時代からわずか10年余り。皆様のご協力によりごみは着実に減り、近い将来、クリーンセンターが3つになるとは驚きです。また、まちには収集を待つ黄色又は透明の有料指定袋が整然と並び、まち美化事務所には、地域で啓発活動等を担う「環境拠点担当」が、収集現場での経験も生かし、市民の皆さんの身近で活躍を続けています。

このように、様変わりした中で、変わらないものがありました。それは、ごみの減量をはじめ、「環境問題」に取り組む皆さんの熱い、強い思いです。

高月会長、山内会長代行をはじめ、久しぶりにお会いした地域や企業の皆さんは、少し年を重ねてはおられましたが、「ごみを減らしたい」「よりよい環境を次の世代に遺していきたい」といった、情熱にあふれた気持ちを変わずお持ちでした。私は、事務局メンバーとともに、皆さんのこうした思いを大切にしながら、皆さんとともに歩んでいきたいと思っております。

今後とも、京都市ごみ減量推進会議事務局をよろしくお願致します。

事務局新メンバーのご紹介

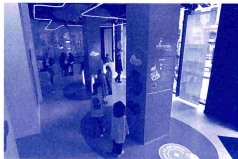


岡崎：今年1月から京都市ごみ減量推進会議の一員に加わりました。これまで以上に、積極的にエコ活動に関わっていきたくて思っておりますので、よろしくお願いたします。

エコさんぽ ～リヨン編～

フランス第二の都市・リヨン。在仏中、そこで目にしたエコロジー施設や、リヨン市民のエコ活動をご紹介します。今回は、水をテーマにエコ啓発を行っている、リヨン市内の施設をご紹介します。

リヨンのオペラ座近く、歴史を感じさせる建物が数多く立ち並ぶ街の一角に、その施設はありました。フランス国内でたぐい一つの、水をテーマにしたエコロジー施設です。ごちゃまじりした館内は、テーマに合わせてインテリアも個性的。いちめん青色の壁にはあたたかみ水がたつたうように、水道管を模した蛍光灯がとうとう廻らされています。装飾だけではなく、わくわくするような仕掛けもいっぱいです。おとなも子どもも、入場料は無料。体験型の施設内では、楽しくエコを学ぶことができます。



ラ・シテ・ドロー／リヨン 館内

★水を大切に使うことを呼びかけたパネル。

少しの工夫で大切な水資源を節約できるコツが、わかりやすく描かれています。判定は、上から“よくできました”“あと少し”“がんばりましょう”。ボタンを押すと、“よくできました”の部分のみ、明かりがともる仕組みです。

子どもだけではなく、おとなも学べる。毎日の生活から無駄を見直し、エコに転換していきましょう。



リヨンはローヌ川とソーヌ川という、ふたつの大河川をもつ歴史都市です。豊かな水資源があるからこそ、消費するばかりではない、大切な資源を守る取組みがされているのです。エコへの取り組みは、国によってその方法やアイデアもさまざま。自分なりのエコへのヒントに活かしたいですね。



水の大切さを楽しく伝えるパネル

京都市ごみ減量推進会議報告誌 ごごみ日和 No.43

〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13

京エコロジーセンター活動支援室内

TEL: 075-647-3444 / FAX: 075-641-2971

E-mail: gomigen@inbox.kyoto-inet.or.jp

URL: <http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/index.html>

🔍 ゴミゲン・ネット

🔍 検索 🔍 で検索出来ます

【入会のご案内】

京都市ごみ減量推進会議は、京都市のごみを減らし、環境を大切にしたいまちと暮らしの実現に寄与することを目的として、市民団体、事業者、行政により1996年11月に設立した団体です。パートナーシップで多様な活動を展開中。京都市ごみ減量推進会議では、ともに活動する会員を募っております。

詳細は、事務局へお問い合わせください。TEL:075-647-3444

企画編集：京都市ごみ減量推進会議 普及啓発実行委員会
(会誌・ホームページ小委員会)